

それは春の風だった。

穏やかな陽気を邪魔せず、乙女の手櫛のようにそつと前髪を持ち上げる微風。そよと吹くそれは、きつといういなものを運んでくる。

出会いとか、別れとか、桜の花びらとか、陽だまりの匂いとか。

次の頁とか。

べらりと、風圧で捲れる頁。本当なら目元までかかる前髪は、依然としてふわり浮いている。だから私は、両手できちんと本を持ったまま、その世界に集中できた。

目を瞑る。すると、見える。

物語のヒロインは黒髪。腰まで伸びた髪はまるで神獣の尾。優雅かつ美的な野性味を放つ濡羽色を従えて、けれどその体軀は小さく華奢。純白の衣装に、息苦しそうに身を縮めていた彼女に、主人公が手を差し出す。

彼女の瞳がこちらを向く。小さな卵型に閉じ込められた、銀灰色の小さな神秘。それを解き放ちたくて、願わくば我が物にしたくて。彼女が手を取るのを待たず、主人公はその頬に手を。そして、その桜色の唇にき――。

「あつまはっらさんっ！」

突然、鼓膜を震わす現実の音声。想像力は臆病だから、一瞬で飛び去ってしまう。ばたばたと忙しくあつけない、その翼に素敵な物語の世界を乗せて、私を取り残す。残された私は、自分が学校の中庭にいることを思い出してしまふ。まわりは昼休みの喧騒。今日はうまいことベンチが陣取れたのだ。だから女子高生の群れに吞まれず、一人分の居場所を息をひそめていた。

「あまはらさん」

二度目の呼びかけで目を開ける。前髪はもうとつづく定位置で、その隙間から睨むような形で前方を見上げる。

そこには物語のヒロインがいた。

濡羽色のロングヘア。折れそうなほど細い体。服はもちろんウェディングドレスではなく、灰色のセーラー服風のワンピース。二つの神秘でしっかりと私を見据え、こてんと首を傾げる。頭に結んだ白のリボンが、猫の耳のように揺れた。

「天原さん」

再度私の名前を呼んで彼女は嬉しそうに顔をほころばせる。

「おっはよ」

前髪をさらりと払う。マスクはそのままにして表情を隠す。たっぷり間を開けてから、どこへともなくたなびく朝霧のような声で、

「……留守さん」

と彼女の名前を呼んだ。

「ね、何読んで、」

「別に」

素っ気なく答えて本を閉じる。あくまでもゆつくりとポケットにねじ込んだ。

「やーもう。ニアは猛獣さんじゃないのにい」

完成された不審者ぶりにも、彼女の笑顔は揺らがない。距離を置くどころか、ほらほら怖くない、と両手を掲げて奇妙なアピールを始めた。

頬が、いや頬だけでなく、いろんなところが熱くなる。彼女の両手を紳士さを欠く力量で鷲づかみにしたい。唇と、首筋と、そのもう少し下と、そのさらにさらに下くらしいにキスしたい。

もちろん、現実の私は冷めたふうを装って、言葉の代わりに咳払いを返した。

「ところでお昼一緒に食べない？」

「……え」

「もう四月の真ん中なのに、あんまりお話ししたことないなあつて」

柔和に微笑み、一步こちらへ近づく。両手ワンピースの腹あたりをきゅつと握りしめている。いじらしい。そのいじらしさに負けて、つい、頷きそうになる。

「おーいニア！」

二人同時に振り向く。声の主はクラスメイトの、西村さん。私服校と自由な校服という二大特権を謳歌している彼女は、ミニスカートで風紀の限界に挑んでいる。耳にはピアス、髪は栗色。

私はすつと立ち上がる。

「につしー、今日は天原さんもいっしょに、」

「ごめん」

言うが早いか走り出す。振り返る余裕もない全速力。心地よい陽光を恐れるように校舎の裏側へ。湿った土を踏みしめ、冷えたモルタルの壁に背中を預ける。震える手で、ポケットの本を取り出す。

開いた頁は白紙。

次の頁も、その次も、最初から最後まで白紙なのだけれど。

そこに今しがたのできことを書きつける。西村さんと気さくに話す留守さん。西村さんの見た目は不良。私は彼女と話したことがない。だから見た目がすべて。不良の女が、留守さんと仲がいい。二人並んだ姿は、麗しき姫君にちよつかいをかける下賤な郎党。

そんなのは、

「解釈違い」

べりりと、黒く文字で埋まった頁を破り取る。すべての頁を白紙に戻す。

現実を理想から、切り離す。

留守ニアはあんなやつとは付き合わない。

だって彼女は可愛くて無邪気で優しく綺麗で、特別な、お姫様。

ニア＝私の理想。

だから、絶対に近づいちゃいけない。

真つ白な頁に目を落とす。すぐに鳥たちは戻ってきて、私をあの世界へ運んでくれる。私と留守ニア、二人だけの物語の世界。穢れなき理想の世界。

何もかも解釈どおり。

マスクの中が、生暖かい息で満ち足りる。

幸せな恋愛のぬくもりだ。

小学五年生。クラス中に春風が吹いていた。

それは、桜の代わりに恋を運んできた。

何となく気になる異性ができて、女子だけで集まれば桃色の話題が咲く。始めは素知らぬ顔をしていた子も、いつのまにかハンカチの柄を気にするようになる。

そんな時期、恋は私こと天原晶あまきのところにも届いた。

当時から激情家だったらしい。想うばかりで我慢できなかった私は、校舎裏で告白に挑んだ。

そして、相手の女の子に泡を吹かせた。

私は同性しか好きになれなかった。そこに捻くれた理由はなく、ただ夜空を見上げれば月があるほどの自然さで、女の子が好きだった。

すぐに気がついた。それはかなり少数派で、恋が恋愛になる確率は限りなく低いということに。どんなに理想の相手がいっても、現実には勝てないということに。

世界に絶望した。

だから世界を創ることにした。

いつものように、視界に映る白いものに集中する。白

は断絶の色だ。継ぎ目のない無は、爪を立てる余地なく何もかもを拒絶する。境界線はいらない。空っぽであることが、すでに極上の壁なのだ。

真つ白なところに、徐々に情景が浮かぶ。主人公は私。王冠を逆さにしたような金髪をさらりと風に任せ、あくまでもクールな微笑を浮かべる。我ながら、というか妄想ながら完璧な王子様。たまらず現実で頬を緩ませてしまふ。これだからマスクが手放せない。

対する留守ニアはお姫様。可愛くて清楚で、王子様である私を純粹に愛してくれる少女。手を差し出せば、恥じらいながらも従順に応じる。そうして二人は手をつなぎ、美しいものしかない世界を――。

「あつまはっらさん！」

いつのまにか閉じていた目を開ける。さっきまで視界を覆っていた白――前の人の体育着は消えている。

「天原さん、どこのグループか決まってる？」

声の主は留守さん。私の意識を引きつけようと、左右にびよこびよこ揺れている。白いリボンもゆらゆら。体育の授業でも外さないなんて、よほど愛着があるようだ。

彼女には目を留めず、さっとまわりを見渡す。六人グループを作れ、と先生が言っていたような。体育館のステージ前でわちゃつづく女子たちは、みんなそれとなく六人に固まっている。

目を閉じて小さくため息。奇数の学級を作った人間は、極刑に処されるべき。

「もしまだだったら私と、」

続く留守さんの話声。その愛嬌に聞きほれながら、断固として無視をする。彼女の横をすっと通り過ぎ、すでに完成されたグループのうちひとつに近づく。

「あの、入れてもらっていいですか？」

内輪ネタで盛り上がっていた六人が、一瞬動きを止める。やがてリーダー格と思しき一人が、いいよー、と頷いた。小さく礼をして、彼女たちから人間一人分離れたところに場所をとる。

留守さんはもう、自分のグループに戻っていた。西村さんと笑いあっている。体育着の太ももに文字を書き、ぐわしとむしる。

授業の内容はバレーボール。自分に回ってきたボールを適当に返しつつ、ネットの向こう側にいる留守さんを盗み見る。

小さな手で精一杯のトス。点が入れば腕をばたばたさせて喜ぶ。ミスをすれば手を合わせて謝る。その可愛いは私の燃料。いろんなところを熱くする。

ゲスな願望を吐露するなら、私はこの手で彼女を猫みたいに鳴かせてみたい。だが、それはあくまでも妄想ですべきこと。現実では、この距離感がちょうどいい。

むしろ不用意に近づいて解釈違いを起こしたくはない。留守ニアは私の理想。そうじゃない要素は不必要。

決して近づかず、けれど常に追い求める。近づかないストーリーカー！

それが、私のたどり着いた解釈どおり。なのだがしかし。

距離を取るのもなかなか難しい。学校とは何かと集団を強いてくる場だ。今日みたいに自分の意志で決められればいいが、先生の裁量やくじ引きなんかをされた日には祈るしかない。二年に進級したとき、同じクラスになっ

てしまったのは不運の極みだ。

何より厄介なのは……、

「あつまはっらさん！」

留守さんそのものである。

授業終わり、ネット用のボールを運んでいるときだ。

澗とした声が追いかけてきた。

「ひとりで重くない？」

「……大丈夫、よ」

いつもどおりクールに返して歩を速める。だが彼女は畳んだネットを小脇に抱え直して歩調を合わせてくる。私から離れる気配は、ない。

同じクラスになってから、留守さんは積極的に話しかけてくる。

まあ、解釈どおりではある。

無口でミステリアスな王子様こと私に、無邪気な明るさを見せるお姫様。彼女の明るさで、私はじよじよに閉ざしていた心を開くみたい。とてもすごく良いけれど、妄想の中だけで結構ですって。

「バレーボール楽しかったね」

満面で笑う留守さん。何か答えようとして、思いとどまる。気安い受け答えは、私の王子様像にもとる。

無言のままきびきびと倉庫へ。無駄のない動きで、所定の位置にボールを寝かせた。留守さんは背伸びをして、ネットを柵の奥に押し込んでいる。もちろん、待たずに背を向ける。

「ちよっとお、おいてかないですよ」

私を呼び止めるだらしない声。違う違う、留守ニアはこんな声出さない。ちよっとお、なんて量産型の女子高生みたいな発音もしない。早く解釈違いを切り離さないと。足早に倉庫を出る。

これ以上、彼女の近くにいたくない。

「あつ」

背後から小さな悲鳴。振り向いてしまう。

留守さんはまだ柵の前にいた。

いや、違う。

「……やだ、どうしよう」

そこから動けなくなっていた。

彼女が愛用する白いリボン。その一端が、柵の隙間に挟まっている。ピンと伸びたそれを、彼女はおっかなびっくり引つ張るが抜ける気配はない。ほつれた部分と柵の金具が、凶悪なコンビネーションを見せているようだ。あれはもう、いったん髪から外して取るしかない。ところが彼女は、なおもリボンを引つ張り続ける。

それも、だんだんと強い力で。

「無理じゃない、それ」

つい口を出す。だが、彼女は綱引きをやめない。

柵が、一瞬間かにぐらついた。

「だめ」

強まる語気。真っ赤にしかめられる顔。何もかもが解り違いで、けれど今もつとも違うのはそこじゃない。大きな埃が、不気味にゆっくりと落ちてくる。

「留守さんやめたほうがいい！」

堪らず駆け寄ってその手を掴む。振り払われるかと思っただけ、彼女はおとなしく動きを止めた。震える瞳で私を見据え、まっすぐに結ばれた唇を開く。

「あの天原さん……離れてくれる？」

「……あ」

触るなつてことね。

ま、まあ。身持ちが固いのは解釈どおり……なのだけどんなか、うん。

言われたとおりの手を放して一歩下がる。

彼女はまだ、困り顔のままだ。

「い、一回倉庫から出て、いいよって言うまでこっちは見

ないで」

彼女は頬を真っ赤にしながら訴えた。

とつさに浮かんだのは鶴の恩返し。決して見ないでくださいって、おとぎ話じゃないんだから。けれども、彼女の顔はどこまでも本気。意図の見えない珍妙な要求に、ただただ困惑して固まってしまふ。

だから、時間切れが来た。

「二人とも号令するから早く来て」

ひょいと、倉庫に首を突っ込んだのは体育教師。ぎこちなく振り向いた私たちに、何らかの異変を感じて片眉を上げる。

「どうした。何か、」

「何でもありません！」

叫ぶが早いか、彼女は一際強くリボンを引いた。

ぶちっとかが切れる音。引つかかっていた糸が千切れたらしい。柵は大きく前後に揺れたが、倒れることはなかった。留守さんがほっと息をつく。

「ご、ごめんね天原さん。変なところ見せて」

青ざめた顔で、それでもいつもどおりに笑ってみせる彼女。

だが私は笑い返さない。彼女の目を見もしない。柵の最上部でゆっくりと転がるダンベルに、気がついてしまったから。

「危ない！」

言葉と同時に、身体が動いた。

伸ばした腕で留守さんを抱く。勢いそのまま、身体を反転させ自分が下になるようにして倒れ込む。背中をたたかに打つ衝撃。彼女の頭がむぎゅつと私の胸に埋まる。ダンベルは彼女が立っていた空間を、上から下へ貫いた。

埃っぽくて薄暗い中、私は留守さんを感じていた。華奢な身体の薄肉つき、乱れた吐息、髪に触り心地、汗の匂い。

欲望がむずかり出す。それを抑えつけるように、ぴーっと脳裏で笛が鳴る。

はい、近い。近すぎ離れて。

変な気を起こしたところで叶いっこないのよ。

わかってる、と顔をしかめ、彼女を抱きかかえたまま身体を起こす。

「えっと、だ、だいじょ、」

「ち」

私の大丈夫を遮って、彼女が声を上げる。膝上の猫のように私を見つめ、何故か鼻をひくつかせた。

「血が出る」

疑問符を口にするより先に、少しずつ大きくなる信号に気がつく。発信源は左肘。目をやれば、赤いものが滲んでいる。

「これくらい別に、痛っ」

慌てて軽傷だと訴えようとするが、強がりなたしなめるように痛みが襲う。

「天原、それ保健室で診てもらいなさい」

横から覗き込んできた教師が、すぐに判断を下す。

「保健委員は、」

教師は一瞬後ろを振り返りかけて、ああと頷いた。

「留守だったな。いっしょに行つてあげて」

保健室。名前を聞いただけで蘇る、あの匂い。

そこに留守さんといく。

頬が痛み以外のもので引きつった。

もちろん、マスクで誰も気づかない。

西日がカーテンの隙間から差し込む。その橙色をもつてしても、空間はまだ白い。

白いベッド、白いテーブル、白い棚。いつもなら喜んで妄想のパレットにしただろう。けれど、今の私にはそんな余裕はない。

視界の端で揺れるもう一つの白。

猫耳のようなリボンが、私を現実縛りつける。

目の前に座った留守さんが、ピンセットで摘んだガーゼを消毒液に浸す。べろっと舌を出し得意げな表情。

もともとあどけない顔立ちなこともあり、小さい子さまごとに見えなくもない。

が、手にした道具はすべて本物。

「ちよつと染みるからね」

道具が本物なら傷も本物で、

「……っ」

その傷は私のものなのだ。

「動いちゃだめだよ」

留守さんはニコニコと、けれど断固たる意志で私の左腕を抑えている。ピンセットを操る手にも迷いがなく、雀が踊るような細やかな動きで、私の傷口を拭っていく。

養護教諭は不在だった。これ幸いと、自分で処置をするのと申し出たのだががしかし。

「怪我人は座る！」

と、猛々しい勢いで椅子を強制され、彼女にやつてもらうことになった。

傷の痛みは、実はずいぶん前に引いていた。では、今一番痛いのはどこかといえ、血管をちぎらんばかりに鼓動する心臓である。

柔らかな輪郭に寄り添う黒髪。睫毛の先端にとまる光の粒。私の肌に触れる指の細さ。全部、思い描いていた

とおり。

そればかりではない。

留守さんは、ときどき目線だけでこちらの顔色を窺う。銀灰色の宇宙は憂いに陰っていた。怪我の原因は、裁判するまでもなく彼女の責任である。罪悪感があつて当然だ。だが彼女の献身には、それ以上の理由があるように感じた。

彼女がただそうしたいからしているような。理由のない優しさが一番の理由。

消毒のつんけんした匂いが、ふいに心地よさ変わる。傷ついた王子様。それに尽くすお姫様。場所は、暖炉のある部屋がいい。静寂と調和する新の音。彼女の健気さに、いつもはクールな私もほんの少し柔和な表情を見せる。

はい、シャングリラ。

素晴らしい妄想の鍵を得て、唇はいびつに歪んだ。こういうとき、マスクなる防衛具には感謝が絶えない。この慈愛に溢れる粗布がなければ、私はとくに人権を奪われていただろう。

「はい、これで終わり」

肘にぴとりと感触。つい大きく身震いをする。だが彼女は予期せぬ動作にひるむことなく、正確な位置に絆創膏を張った。

「上手ね」

「え？ ああ、これ？」

彼女は手にとったピンセットを、かちかちと鳴らしてみせた。

「一年生のときも委員だったし、放課後はお手伝いもしてたから」

「……そう」

「……そう」

「……そう」

「……そう」

「……そう」

素つ気なく答えて目を細める。ほかの生徒のために奉仕する留守さん。妄想の中の姿と重なるころはある。だから惜しい。それが飼育委員とか図書委員とか、別の委員であればよかつたのに。

どうして保健委員なのか。ちらりと主不在の事務机に目をやる。さつさとそこから離れよう。

「ありがとう。もう平気だから、」

「天原さん」

立ち上がりかけた私を押し戻す。再び深く腰掛けた私の膝に手を突いたまま、彼女はこちらの瞳をじっと覗き込む。その近さは、マスクがなければお互いの吐息がまじりあうほど。

「さつき、何で私のこと助けたの？」

「え？」

言いながら、彼女がずいっと近づくと、マスク越しにも陽だまりのような匂いがわかる。

何でと言われても。

あのとき彼女を庇つたのは、完全なる無意識というか、考えるより先というか。当然のことをしたまで、というのが正直な答え。だが、それをそのまま答えるつもりはない。

というかそんな気障な台詞、妄想でしか言えっこない。「天原さんってさあ、」

沈黙を返事として受け取つたのか。留守さんは、リボンの具合を気にしながら話し続ける。

「私のこと可愛くないって思ってるでしょ？」

「え、いやそれは」

「だつて避けてるでしょ、私のこと」

むしろあなたのことは世界で一番可愛いと思ってるし、

寝る前の臉の裏はあなたの可愛い顔だし、あなたのことを避けるのはその可愛さゆえなのです。

異常が真実なのがしかし。正直に話せばひかれること間違いなし。人権が惜しい私は早口言葉をぐつと飲みこみ、戸惑いで答えられない風を装う。

「これだけは、答えてよ」

一方で彼女も、困惑に眉を曲げている。誰にでも笑顔で、どんなときも朗らか。留守さんが絶対にしない顔。

雷雨の前の空のような鈍い不安を浮かべ、彼女はようやく口を開いた。

「あなたが、私の王子様なの？」

今までで一番、不可解な質問。

不可解だけれど、わかる。

留守さんと、私の留守ニア。

絶対に近づかないはずだった二つが、解釈あつた。

今のセリフって、もうほとんど告白じゃない。

それも、妄想で留守ニアに言わせていた告白だ。

だから幕を上げる。前髪を片側に寄せ、まっすぐに留守さんを見つめる。ずっと私ひとりだった舞台上に、彼女を配役するために。

ここに、留守さんを私の留守ニアとして認めよう。

そのための契りを。いつも妄想で練習した愛の言葉を。「……え、あの、ね。そのお」

どうしてだか言えない。言葉はいっぱい出てくる。だが、どれも口の先に届くまでに恋の熱で燃え尽きてしま

う。

「わ、」

私が。

「——いいや、私こそ君の王子様さ」

空気を震わせたのは私の声じゃない。

あくまでも女性のそれ。だがチョコレートを思わせる艶のある低音と朗々とした響きは、聞くものの鼓膜を甘い熱で犯す。

息を詰めて、振り返る。いつの間にか開いていた戸。そこにもたれかかる人影。

「なんてね。だけど、天原くんに王冠はもつたないよ」

まず目に飛び込むのは髪。暗い茶色にうつつすらと浮かぶ赤。緩く波打つそれを、片側に寄せて結っている。大胆に晒された額では、鶯色の眉が綺麗なハの字を描いていた。

「る、るう先生い！」

留守さんが甲高く叫ぶ。その顔が驚きに染まっていたのは一瞬で、すぐに弾けた喜びに切り替わる。

「先生どこ行つてたのお？」

「いやあ、ちよつと休憩をね」

かつんとヒールを鳴らしてこちらに歩み寄れば、羽織つた白衣がわずかに靡く。その白は、同色の背景の中でも不思議に眩しい。

白衣の貴公子、針谷流子。鮎か香水か、それとも。得

体の知れない甘い香りを携え、彼女は私たちの前にすつと立つ。

「休憩って、まーた煙草吸つてたんでしょお」

留守さんが半眼で針谷を睨みつける。

「煙草？」

それがキャンディーであるとわかつていながら、針谷の啞えた棒を凝視する。

「こら留守くん。それは内緒だつて言ってるだろう？」

やれやれと腰に手を当てて首を振る。大仰な身振りも、狐のようにひよろりとした細身と合わされば妖しく美し

い。

「いーの！ こうやってるう先生の評判下げて、煙草はこりごりだあって思わせてやる」

「ずいぶんと遠回しだなあ。現実味がない」

「じゃあ、やめてって言ったらやめてくれる？」

「やめないねえ」

「もうー」

何食わぬ顔で微笑む針谷に、留守さんはふうと頬を膨らませる。教室でも、仲のいいクラスメイトに対してよくやっている仕草。

「だけど、いつもとは明らかに違う。」

「いつもはただ可愛いだけなのに。」

今は――。

「はいこれ」

目の前に突き出されたのは、黄色い包み紙の棒つきキャンディー。

「口止め料、ついで」

針谷は艶のある低音で囁いて、唇の前に人差し指を立てた。そのべたついた甘さのある表情から視線を離さずに、ゆっくりと賄賂をもぎ取る。味も確かめず、ポケットに押し込んだ。

「ところで、さつきは何の話をしてたんない？」

飄々とした視線が留守さんのほうを向く。

「え、つとね。体育のとき、天原さんが私を助けてくれてね、」

「それが王子様みたいに優しくかったって話かな」

少し間を置いてから、留守さんが頷いた。

「……さつきの、もったいないって、どういうことですか」

脳内でイメージしていたのより、情けなくぼそついた

声が出た。

「君はまだ少女だからね」

返ってきたのは、ここが舞台と勘違いしているような朗々とした響き。針谷は絹が流れ落ちるように跪き、私に視線を合わせた。

「少女っていうのは、何者でなくとも許される夢のように儂い期間さ。そこで無理やり役を背負うのはもったいない。王子様なんて重たい役は、特にね」

頬が熱くなる。留守さんの可愛さにのぼせているときとは違う。深淵から突き上げるような、荒々しさ。脳がちりつく……官能の訴え。

これは、私にそっちの気があるからか。それともその他大勢も感じるものなのか。わからない。わかることは一つ。この暴力的な魅惑が針谷流子であり、白衣の貴公子とあだ名される理由なのだ。

「優しさっていうのは孤城さ。与える側の本心を、永遠に閉じ込めてしまう。その象徴である王子様つてのは、名譽ある呪いだと思うね」

むずかる心をじかに採みほぐすような口調。芝居がかった言い回しもあって、円熟した朗読劇のように心地よく脳に染み入る。

けれどその波に抗って、熱く燃える黒炭がある。

さつきからべらべらと偉そうに、堂々と。

まるで、自分はその王冠を被ったことがあるとでも？ 前髪とマスクの隙間から、射殺さんばかりの眼光を送る。が、それが届いたか確認する前に、針谷はさつと立ち上がる。

「そうだ。君に託したいものがあるんだ」

「何ですか」

「灰園くん宛てのお手紙だよ」

彼女はいたずらっぽく片目を瞑る。

「が、私としたことが相談室のほうに忘れてきたよう

で、」

「わかりました」

「あれ、いいのかい？」

立つが早いかさつと踵を返した私を、白衣に包まれた腕が掴む。

「天原くんは、私に用事があったんじゃないのかい？」

「……先生にはなく、保健室にはありますが、」

「しゅしゅ振り向いてその眼前に左肘をつきつける。」

「もう済んだので結構です」

「おや」

針谷は目を丸くして私と、留守さんを交互に見た。

正確には、私ではなく留守さんが治療した私の傷を。

「ずいぶん上手になったじゃないか」

肩におかれていた針谷の手が離れる。その移ろう先は留守さんの頭。

「まあね！ 私、るう先生の一番弟子だもの」

リボンに気をつかわず撫でる針谷。留守さんは体育着の裾を握りしめ、堪らないといった様子。頬はもちろん緩んでいる。

よくある光景だ。西村さんあたりにも、しよつちゅうなでなでされている。気の抜けた表情も、猫が気持ち良くなっているような仕草も、甘えた声も。留守さんのいづもどおり。

違うのはそれ以外。

「……えへへ」

ほんのり染まった頬と、潤んだ上目遣い。

たったそれだけで――近い。

今度こそ踵を返す。大股で二人から遠ざかり、後ろ手

に戸を閉める。

廊下の空気は冷たくて、自分の熱を思い知らされる。

二人の話し声を恐れて、突き当りまで歩く。夕陽から逃れた暗い隅つこに、溜めていたものをようやく吐き出した。

「違う。全部、違う」

何もかも解釈と違う。

保健室に足しげく通う留守さん。気障な女狐と仲睦まじげにする留守さん。あいつに褒められて喜ぶ留守さん。

あんな、まるで、恋してるみたいな。

私の理想の留守ニアに、一番近い表情なんてしない。

掌に書きつけてはむしる動作を繰り返す。でも足りない。紙が欲しい。純白を一瞬だけ穢し、音を立てて千切りたい。私の理想から、いろいろな現実を切り取った実感が欲しい。

あるはずのない手帳を探し、体育着のポケットをまさぐる。

触れたのは丸い感触。

取り出せば、病的に鮮やかな黄色のキャンディー。

腕を振り上げて、降ろす。叩きつけられたキャンディーは思いのほか弾んだ。その浮かれようをたしなめるように足を乗せる。だが砂糖玉は意外にも固く、足裏から逃れてころころと回転した。

何だか呼吸が辛くて、マスクを外す。口元にはびっしりと水滴。それが消えるほど待っても、全然薬にはならない。

ちぎり捨てた紙が逆風で戻ってきた。そうして口に張りついた。

そんな息苦しさ、ずっと続いた。

夕方五時の時報が流れ出す。哀愁たつぷりの童謡は、誰かの寂しさにつながるかと、音の手を伸ばしている。

それから逃れるように、私はやや強めにマンションのドアを閉めた。

ひとまず抱えたビニール袋をおく。腰をおろしてローファアを脱ぎ、とんと揃える。靴はその一つきり。

「ただいま」

腹に力を込め、叫ぶ。返事はない。

左肘に気をつかいながら、買い出し品をリビングに運ぶ。テーブルには、空の食器が放置されていた。乾いた油污れに眉をひそめシンクへ。台拭きを手にして戻り、点在するソースの汚れを駆逐する。椅子の位置を整え、ティッシュが充分あるかも確認。無地のペーパーナプキンに、フォークとスプーンを二セット並べる。スプーンは、どうせ使ってくれないだろうけど。

舞台装置は抜かりなく揃った。あとは主役を待つのみ。そして、その主役は今から私が作るのだ。

エプロンをつける。袖をまくる。マスクは外してゴミ箱へ。いよいよまな板に向かう。

まずはマッシュルームを濡れた布巾で拭く。直接洗うと水分を吸ってよくない。あえてざく切りにする。にくは、根本だけ切って包丁の腹で潰す。オリブオイルでひと泳ぎさせ、入れ替わりでマッシュルームを投下。半歩遅れで刻んだベーコンも入れる。火を止めたら、並行して茹でていたパスタとあえる。麺は平らなフェットチーネ。ボウルに移して混ぜることで、油が乳化するのを防ぐ。

本日の主役。

マッシュルームとベーコンのオイルパスタ。

二人分盛りつけて食卓に運ぶ。深皿がごとりと着地す

れば、棺のように静かだった隣室で何かが動く。

「はあああ、質のいい飯テロの匂い〜」

起きてたのね。

エプロンを外しながら声のした部屋に向かう。

「夕飯、できたわよ真理亜」

ノックなしで扉を開け放てば、眼前に広がるのは地獄だった。

床を埋めるのは蛇の群れ。細いもの太いもの、黒いもの白いもの。のたくりうねる、コードの束。その収束する先は無数のモニター。めいめいの映像を青光りさせている。電子機器以外の場所には、うずたかく積まれた本の塔。不穏な傾き具合は、賽の河原を連想させる。

けれどこの地獄は、きつとかつて天にあつたものなのだ。そう思うのは、部屋の中央に鎮座する天蓋つきベッドのせいだろう。純白のかけ布は、決して周囲の惨状に侵されない。しんと、深雪の輝きを守っている。

そして、それが堕ちた天ならば。

そこに御座するのは随天使だ。

「大胆なブライバシー侵害。同居人の特権じゃーん」  
くつくつと低い声で笑い、彼女は体育座りの膝をぎゅつと抱えた。

唯一純白の御所を穢すものがあるとすれば、それは彼女の髪だった。灰色のロングヘア。火はどうに絶え、あとは風に吹かれるのを待つのみ。そんな物悲しい終焉を思わせる色。

「おかえりくらい返して欲しいんだけど」

言いながら、頼まれていた漫画を適当な場所に置く。

「ところがこれがあるからさあ」

彼女、灰圍<sup>はいぞの</sup>真理亜は悪びれない様子で、首にかけたヘッドフォンをつついた。

「精一杯出してるつもりなんだけど」

「音量は条件値なんだけどパッションがなあ」

「聞こえてんじゃない」

「あっちゃあファンブル」

赤い瞳が、ぐるりと一回転。

「とにかく早くご飯」

「それよりさあ反省会しようよ」

背を向けかけたところでぴたりと止まる。胃が、空腹以外のものでざわついた。

「見ないでって言うてるでしょ」

「私じゃないもん。ミカエル三号だもん」

形のいい唇をとがらせ、傍らにある機械を撫でた。四本の足を持つ、菱餅のような口ポ。一つ目のような高性能カメラは、ただ静かにレンズを光らせている。

その親玉はお前だろ。そう糾弾したところで、買ったのはパパだとか斜めに責任転嫁するのだろう。

「聞いてよお。今日、るるハルも北西も動きなくってさあ。見どころあるのって、あきニアだけだったんだよね」

振り向けば、彼女はもうリモコンの一つに手を伸ばしていた。一番大きなモニターが反応する。

映し出されたのは、埃っぽくて薄暗い空間。無人だったそこに、二人の人影が入ってくる。

数刻前の、私と留守さんだ。

「こことか実質密室でしょ。いつそ壁ドンでもしちゃえばよかったのよ」

「してどうするのよ」

「キスでコンボ繋げるに決まってんじゃないん」

「マスクあるし」

「いや外せよう！ ほら、眼鏡外したら美少女みたいなの

ノリで、マスク外した天原さん胸キュン展開はワンチャんじゃないかな」

「そういう妄想ならアリね」

「現実をしる！」

彼女は心から残念そうに叫んだ。一方、その病的な赤には、被膜のように好奇心が浮かんでいる。

パパからもらった盗撮口ポを学校に派遣。そして、彼女曰く萌える二人組を観察する。友愛以上、恋人未満の二人を少女漫画の感覚で垣間見する。

とはいえ女子校だから、成立するカップルなんて滅多にない。だがそれがいいとは彼女の言。女が二人並んでだけで尊いとかなんとか、恋愛感情は重要じゃないとか、長々と高説された記憶が蘇る。私には理解できないし、正直滅んでくれて言説だ。

ともかくこれが灰園真理亜の趣味。彼女自ら、天使視点とかつかつけて呼んでいるものだ。

「そのあととさあ。私がせっかくチャンス作ったのに晶ときたら、」

「チャンスってなに？」

「質問を投げかけてから、答えに気づいた。」

「まさかあのダンベル、」

「ただの天使の悪戯よ」

冷たい声で言い放ち、彼女は画面を操作する。映し出されたのは、斜め上から俯瞰した保健室の光景。私と留守さん。ちょうど、消毒が終わった場面。

「はああ、脈なし選択肢縛りのギャルゲーかよ」

ぶつぶつ言いながら、真理亜は前屈みになって画面に食い入る。

「ここさあ何で告らなかったの？」

「それは、だって、留守さんがうまく答えてくれるかは

わからないし、」

「あのセリフは恋愛ルート解禁のやつでしょ？ えっ、まさか難聴型鈍感主人公ですか？」

「……パスタ、冷めちゃうわよ」

いつになく興奮気味の真理亜に、くるりと背を向ける。全く。私は彼女のおかずを二重の意味で提供してあげているのだ。もう少し立場をわかまえて、

「針谷先生はさあ、生粋の主人公だよね」

声はどことなく乙女だった。

振り返る。口もとを緩ませる真理亜。視線の先には、ズームされた赤髪。音声はミュートのはずなのに、脳裏にべつとりと蘇るあの甘ったるい声。

「白衣の貴公子たまらんわ。あれでカウンセラーとして一端つてとがまたいい。アリだよ、心に傷を抱えた少女を更生させるストーリー。ぐぐれば普通にそういうゲームありぞ、」

「でも私、あいつとは違うから」

足裏に丸い感触。ぐつと足を踏ん張り、鉛玉の幻影を踏み殺す。

「ほら私ってクールだから。あいつみたいな八方美人とは志してるものが違うのよ」

それでも、消えない。地面と足の間に、妙なものが挟まっているような。

合わない靴を無理やり履いているような違和感がずっと残る。

「ま、そうだねえ」

真理亜は呑気に私を見る。

「晶は違うよね。だって――、」

その音はもちろん、口からのものじゃない。



彼女は、悲痛に眉を寄せて腹を押さえた。

「か、活動限界だとッ」

「食べましょっか」

私はどこかほっとした気持ちで、天使の御所を出た。

「そうだ、真理亜にまた来てるわよ」

リビングに戻り、鞆から分厚いファイルを取り出す。

「お、キリ番十通目！ 先生、あとどれくらいで折れるかなあ。あ、中身捨てといて。どう口説かれても永世不登校だから」

言ってることは悪魔的。だが、白いまつげの優雅な微笑みはまさに天使。

この容姿がなければ、彼女は不登校になんてならなかった。この容姿があつたから、彼女は不登校を許された。本当、歪んだ存在だ。

その歪みに、こういう関係になる前に気づきたかつた。

「……あ、ちよっと待って」

げんなりとゴミ箱に向かう途中、呼び止められる。

「ね、それ何？」

丸く開いた目をばちつかせる真理亜。つられて私も自分が手にしたファイルに目を落とす。

半透明の中にはここ一週間分のお知らせ類。それから針谷が手がけたであろう保健室だよりと、手紙の入った封筒。不登校の生徒は真理亜だけじゃない。それを全員分わざわざ用意しているのか。生徒の人望稼ぎに抜かりのないやつだ。

「その本、いつもはないよね？」

彼女の指摘でようやく気づく。ファイルから大きくはみ出した革張りの背表紙。

「何かしら」

手に取りながら、相談室に行ったときのことを思い返す。教師用の机はだいたいぶ散らかっていた。加えて、あるとき私は保健室の一幕を引きずっていた。手元が正確だった自信はない。間違つて持つてきてしまったのか。

ひとしきり無地の表紙を眺めてから開く。別段考えての行動じゃない。ただ雨が降ったから傘を開くくらいの無意識で、その中身を見てしまった。

見たからわかる。

これが、一冊の本以上に重いものだ。

そもそも、本ですらないことを。

「わあお炎上案件」

真理亜が目を輝かせる。彼女が目をきらめかせるのは、いつだって危うい愉悅に対してなのだ。

「……う、ええ」

彼女の対面で、私は悲鳴ともつかない声を上げる。それは、秘密の鍵が開く音。

後悔はもう役に立たない。

「ぱつと行って、しゅつと入れる。ミッションコンプリート。簡単でしょ？」

スマホ越しに聞こえる真理亜の声。

「無理無理無理。ぜんっぜん無理！」

相手に見えないとわかつてながら、全力で首を振る。返ってきたのは、何度目かわからない大きなため息だった。

「あのさあ、これでも結構譲歩してるんだよ？」

呆れた声音から、彼女が髪を指先で弄ぶ様が目に浮かぶ。

「ホントはその火薬で特大火花打ち上げたいのに、晶がどおーしてもって言うから穏便な解決策を提示したん

じゃん」

「……でも真理亜、私をけしかけて楽しんでるわよね？」

「あ、バレた？」

くつくつと蛇のような笑い声。だめだ、真理亜は完全に天使モードだ。今の状況を、面白い案件として俯瞰している。

私に残された選択肢は二つ。尻尾を巻いて真理亜をがっかりさせるか、それとも彼女のご所望どおり実行するかだ。

「どのみちそれ、封印しとくわけにもいかないんだしさあ。遅かれ早かれご愁傷様よ。あとでレポートよろ、じゃ」

一方的な言葉で通話は切れた。これ以上話しても無駄だとわかつていたので、特に悲観もせずスマホをポケットに滑らせた。

春の夜風が前髪を揺らす。頭を冷やすにはぬるすぎるし、背中を押してもらうには弱すぎる風だ。私を鼓舞できるのは、私しかいなかった。

大丈夫。どうせ何も起こりっこない。真理亜の言うとおり、ぱつと行ってしゅつ、よ。たったの三十秒、緊張に胃を焼けばいいだけ。

不審者扱いで通報されとか、間違つたポストに入れちゃうとか、春の夜にあるまじき突風で例のブツが吹っ飛んで奇跡的確率でうちのベランダに届くとか。

そういうのは全部、私の、妄想。

解釈違いになりますように。

その祈りを合図に、ずつと張りついていたレンガ壁から背中を離す。走ると不審がられる気がしたので、大股散歩で道路を渡る。くつと視線を上にして、暖色の光を

まどうマンションを見上げた。

十五階建て。私の部屋よりも高い。ガラス越しにエントランスを覗き見れば、ありふれた観葉植物だけでなくソファも設置されている。端々で演出される高級感が鼻につく。

いいとこ住んでんじゃないの。

そのくせあんな趣味を、ね。

急に、そびえるようだったマンションが矮小に見えた。マスクの下は嘲笑のまま、大股で自動ドアをくぐる。オートロックの操作盤には一瞥もくれず、隠し通路のような横道からメーブルームへと進んだ。

ずらりと並ぶ郵便受け。真理亜のメモを確認して、

六〇三号室のものに駆け寄る。鞆から例のブーツを取り出す。革の感触を拒むように、手がぬるりと手汗を吐いた。

「大丈夫よ晶」

あとは、しゅつと入れるだけ。

横長の口に狙いを定める。一瞬、つかえたらどうしようという不吉な想像。だが、ブーツは体感よりもずつと薄く、するりと中へ吸い込まれた。続いて、ポストの底とぶつかる鈍い音。

みっしょんこんぷりーと。

私が妄想していた失敗は、一つも起こらなかった。

解釈違い、だけど解釈どおり。

小さく拳を握る。何事もなかった、という最高のレポーター。堂々と、エントランスを闊歩する。軽やかな靴音は勝利の行進曲。

そこにかつん、と。

厚みのあるヒールの音が混じった。

私が観葉植物の陰に隠れるのと、入り口の自動ドアが開くのは同時だった。

「すまないねえ外食続きで」

艶のある低音。熱のある甘ったるさを孕んだ響き。聞き間違えるはずもない天敵の声。けれど私を驚かせたのはそれじゃない。

「いいよ。るう先生お仕事いっぱいだよ」

続いて聞こえた、透明感のある声。水が染み入るようすんと鼓膜に吸い込まれる。その声に毒が盛られていたとしても、私は穏やかに聞き入って息を引き取っただろう。

というか、そうやって死にたかった。

「……嘘」

この光景に、心を焼かれなくて済んだのだから。

仕事帰りの針谷流子。その隣に、学生鞆を抱えて立つ留守さん。

留守さんは実家暮らしだ。たまたま針谷と同じマンションに住んでいるという線はない。さっきの針谷と夕食をともにした趣旨の発言。あれがあるから、友達や親戚を訪ねてきた可能性も消える。

つまり、残った可能性は……。

オートロックが解除され、自動ドアが開く。針谷に続いて入る留守さん。濡羽色のでっぺんに鎮座するリボンが、誘うように揺れる。

その白に望みを託すように。

私は、閉まりかけの自動ドアに身体を滑り込ませた。

限りなく、ゼロだ。

留守さんと針谷。

教師と生徒で、女同士で。

そんな漫画みたいな組み合わせありえない。非現実度は、私の妄想と互角だろう。

実は親戚だとか、実はわけありで苗字が違う親子……は嫌だし、ない。似てない。ていうか、あの女狐がスウィートキュートな子猫の親なんて絶対ないしお願いだからやめて。

小学校の校門前で写真を撮る留守さんと針谷。浮かびかけた光景を、くしゃくしゃにして潰す。

それはまあ、ないとして、ともかく！

私には確かめる必要があるのだ。二人が全くもって恋とはほど遠い関係であることを。そして、明日も枕の下に留守さんの写真を敷き、留守さんの夢を見て、真理亜提供の留守さんの声をアラームに起きる！

安心して妄想ストーカーするために、事実確認は急務であり、だから今私が針谷家のクローゼットで息を潜めているのもすべて必要悪なのである。一番悪いのは鍵をかけ忘れた針谷だ。お前の防犯意識がティッシュ以下の薄さだから、侵入計画が可能になってしまったのだ。玄関脇にウォークインクローゼットのある高級物件に住んでるから、隠れる選択ができてしまったのだ。

ここまで来たら自棄だ。

そつと廊下に出る。閉所とマスクの合わせ技で、乱れた呼吸はまるで犬。整える余裕もなく、抜き足差し足でリビングへ進む。

座ったらワイングラスを回したくなるようなソファ。

指紋が気になりそうなガラステーブル。あらおしゃれ。

そこで、燦然と生活感を放つ物体。

洗濯物の山。

嫌な予感がして、対面型のキッチンを振り返る。汚れた皿の吹きだまりは予想の範疇。その横で干からびているのは……猫用おやつのごミ？

手がむずむずする。が、家事を代行する優しい妖精に



びりつと不吉な音がした。それはきつと、私の心の皮が破れた音。むき出しの心は、むき出し欲望で腫れあがる。服越し、ではあるけれど。その境界に食い込むほど密着したありのままの留守さん。それはもはや裸の交接裸で触れ合うっていったらそれはもう、せ……。

ぼたりと、雫が唇を濡らす。舐める。しょっぱい？

「いや、にやにやにや……」

洋上の月のように、おぼろげに滲む留守さんの瞳。そこからぼたぼたと、潮の雨が降る。

「ニアの、リボン……」

その視線を追って、ようやくさきほどの音の正体に気づく。

私に握られたリボン。それから彼女に握られたリボン。真ん中で真つ二つに裂けてしまっている。

その片割れに縋り、彼女は大口を開け、泣く。

「ふわああああおわあおわあうにやあ」

慟哭する声はまるで猫の嘶き。拳でぐしゅぐしゅと頬を擦る様もどことなく猫。何より象徴的なのは髪。リボンの代わりを務めるように、左右からぴんと張りだしたくせつ毛。垂れた猫の耳。

罪悪感に困惑が勝る。

留守さん、これじゃあまるで猫。

学校じゃこんな様子は……。

だが、思考は長く続かない。

「とりあえず、少しお話をしようか」

倒れた私を覗き込む影。

「君の罪についてのお話をね」

暗がりの中、鈍く灯る赤髪。鳶色の目は、侮蔑と嘲笑の中間を示している。

だが何より目を引くのは、

「先生。何で、その恰好？」

「ん？」

私の疑問に、針谷は不審な点を探るように身体を捻る。下着姿の肉体美に、不覚にも頬が熱くなった。

おしゃれと生活感で混沌とする針谷家のリビング。

そこで私は、できるだけ小さくならうと努力していた。

「そんな頭を下げないで」

ガラステーブルの対面で、針谷が曖昧な微笑を浮かべる。

「別に、悪いようにはしないからさ」

普段の舞台役者のような明朗さはない。むしろ、その

声音は脱ぎ捨てられたタイトツのように軟化している。気

さくなおねえさんって感じで好感と興奮を覚えるが、私

は断固として顔をあげない。

「先生、あの」

「何だい？」

「服着てくれますか？」

一瞬だけ視線をあげ、すぐに黒レースの暴力に負けて下げる。えつろ。おろろと吐きそうなほどの魅惑蠱惑誘惑。まともな話し合いなどできるかばーか。

「え、やだね」

針谷は心底おかしそうに笑う。

「私の家のドレスコードは私が決める」

「……ほとんど裸が指定服なんですか？」

ちらりと部屋の隅に視線をやる。観葉植物の影に留守

さんはいはる。緑越しに見える、湯上りにバスタオルを羽

織っただけの姿。

「そ。君は客人だから強要しないけど」

私に気づくと、留守さんはフシユウと鼻を鳴らして身

体を縮めた。

「しかし天原くん。君は分別あるストーカーと思っただんだが、まさか自宅侵入をするとはねえ」

煙草の煙をくゆらすような呑気な言葉。だが、さらりと告げられたありえない事実には、私は戦慄する。

「な、何でそれを……」

「いやみんな知ってるよ。君の想い人がニアってことはね、と針谷が笑いかけたのは観葉植物の方向。首をギリギリと曲げ、留守さんを見る。

一方、彼女は私を見ない。

「流子がそう言ってたし、そうなんだなって知ってた」

私ではなく針谷に、うんと頷き返した。

「あの、留守、さん？」

つい声をかけてしまう。やつと私に向いた彼女の瞳。

銀灰色を満たすのは、野性で磨かれた牙のような敵意。

唇は真横に伸びて口角にしわを作っている。

「……私の留守ニアは、どこ？」

「ニア。わかってるね」

針谷が気の抜けた手招きをする。

「こうなってしまったからには、説明するしかない」

留守さんは意外にもすんなりと動いた。長らく身を潜めていた物陰が出る。私の視線は、彼女と反発して天井を向く。

「初心だなあもう」

呆れた声に続いて衣擦れ。その音を信じて視線を戻せば、留守さんの全裸はネグリジエに包まれていた。ほつとする私に反し、彼女はフリルの裾を邪魔そうにしている。

「天原くん。君はさっきから、気になっているんじゃないかな。ニアの人が違ったような、というか猫が取りつ

いたような振る舞いには」

針谷は背中に手を組んでニコニコと語る。

「その答えを、今から教えてあげよう。口じゃなくて、身体でね」

明るい笑顔が、妖しい微笑に代わる。焦らすようにゆっくりと、後ろから出された右手。そこ握られた、よくしなる細長い棒。先端には、見るだけで身をくねらせたくなる装飾。

それは、玩具だった。

「あ、やだ……」

留守さんの頬が紅潮する。じり、と一歩後ずさるが、濡れた瞳は玩具に釘づけ。

「だめ。だって、見てるよね……」

「見せてあげるんだよ。だってほら、天原くん真面目だからさあ。君の身体でわからせてあげたほうが早いだろう？」

吐息交じりに囁きかけ、針谷は艶めかしく手首を動かす。掲げた左腕の影から、蛇の舌のようにちろちろと誘いかける玩具の先端。こそばゆく揺れる羽飾り。一瞬、制止。次に大きく動いたとき、ついに欲望が弾けた。

「うにゃあん！」

両手を伸ばし、跳躍する留守さん。それを見越したように、針谷は身体ごと大きく猫じゃらしを振るう。

「よおしよし、いい子だ」

針谷は、留守さんの猛攻をかわし、猫じゃらしをもどかしく揺らし、さらなる興奮を誘う。留守さんは、針谷の思うがまま恍惚を発露させて踊る。

下着姿の女が、少女を猫じゃらしで弄ぶ。

この光景はあまりにも、すごく、  
「わかりませす！」

起立、絶叫。オルゴールが制止するように、二人の動きが止まる。

「お二人がどういう関係なのかはわかりました！ 末永く幸せに、変態プレイをお楽しみ遊ばせてください」

「ヘンタイはお前だヘンタイ！ これは遊んでるだけで、そういうのじゃないもん！ エッチな目で見るにゃ！」

あまりの説得力のなさに、反論する気が失せる。私は呆然と、顔を赤くする留守さんを見つめる。

「私は、流子とは、まだ……」

ふいに彼女は、いにゃああと轢かれたような鳴き声をあげ、地べたを這うように隣の部屋に消えた。訪れた静寂は心地よく、私は脱力してソファに沈んだ。

「どう、わかったら？」

肩で息をしながら、針谷も深く座る。

「ええ、まあ。世にはいろんな性癖があるなあ」と

「頭冷やせよ発情レズ」

ふつ、と心底楽しくなさそうな笑み。暴言に居を突かれた私を、あごを引いて見下す。

「いいか、あれが彼女の本性だ」

息が急に、苦しくなる。私は今留守さんに最も近いところにいるんだ。

彼女の真実の、限りなく近くに。

「ニアは猫なんだよ。鳴き声はにゃあだし、人を舐めたように太々しいし、猫じゃらしに興奮する」

ニアⅡ猫。

「普段の振る舞いは全部、猫である本性を隠すための猫被り。つまり、」

そうであるならば、

「君が恋していた留守ニアはすべて、虚構なんだよ」  
ニアⅡゼロ。

太ももに指を走らせる気力すら起きない。地球を包めるくらい大きな紙を用意したって、この現実引き離せない。だって今や、留守ニアそのものが、私の解釈違いなのだから。

私のお姫様。可愛くて清楚で誰にでも優しい。

その妄想の依り代は偽りだった。

核を失った幻想は、形のない霞となって掻き消える。

白がはらはらと舞い落ち、理想と現実の壁は崩壊する。

「……天原さん」

耳に届いたのは、透明感のある響き。けれど声の主は、いつもとは違う表情をしている。明るさも朗らかさも無い。ほとんど無に近い、気まぐれな表情。ただ眉の下がり具合から、申し訳なさそうにしているのだとわかった。

「ごめん、ね？」

疑問符つきで言つて、その意図を尋ねる前に、ひゅつとまたドアの向こうに消える。

彼女の、人見知りの猫をつくりの動作で。

私の留守ニアは死んだのだ。

他言はしない。そう誓つて、私は針谷家を出た。

エレベーターを待つ間も不思議に涙は出なかった。ただ、虚しい。茫洋とした虚しさは、白霧をたたえた湖。

そのほの暗い湖面を、私の意識はどこまでも滑っていく。「お姫様は、本当は猫。あり……かしら」

思いついた妄想を口にする。想像の翼は、力なくしな

ていて、私は暗い湖面から飛び上がれない。何か、白いものを。現実を、断たなきや。しかしとつさに頭に浮かんだのは、引きちぎれた白いリボン。一緒に蘇る、留守

さんの声。やめて、そんな猫みたいな、というか猫そのものの声は、違う。

違うのに……。

エレベーターから降りたときだ。私の求めに応えるように、視界で白が翻った。

「いやあ。この歳になると階段はきついねえ」

大理石の壁に背中を預け、針谷は余裕たつぷりに口を吊り上げた。いつもと違い、白衣ボタンはきっちり閉じられている。

「……まさかその下」

「君も、ジャージで外出ることくらいあるだろう」

真面目だなあとぼやく針谷。私は、露出狂という単語をどうにか飲み込んだ。

「お話の続きをしよう。ここじゃ何だし、外でね」

彼女は片目をぼちつと瞑ってみせる。いつもなら妄想で百発殴つてるところなのだけど。今はあらゆる感情に灰がかぶさつているらしい。何の憤りもなく、私は黙って彼女に従った。

案内されたのはマンション裏の喫煙所。何の断りもなく、彼女は取り出した一本に火をつけた。艶めかしい唇が、吸い口とキスしているタイミングで切り出す。

「さつきのはどういうことですか？」

ふーっと紫煙で星空が曇る。

「さつきって？」

「何で、私がストーカーだと断言したんですか？」

ようやく私に向けられた瞳は、確かに瞬いていた。

「私が留守さんを好きってことは、まあ表情とか見てればわかると思います」

それも不本意だけど。

「けど、私は徹底して彼女と距離をおいていた。だからストーカーだと思われる要素はゼロだったはず」

近づかないストーカーなんて、本来はありえない。

なのに、この女はそう知っていた。

「……お利口さんだ」

ぎらりと、瞳の瞬きは最高潮になる。

「白状するとだね、私はずっと君を見ていたんだよ」

「わ、私を？」

「そう。ニアの飼いの候補としてね」

長く煙を吐いたあと、

「あの子は猫に育てられたんだよ」

と遠くを見る目で語り出した。

「両親は高給取りゆえに不在がち。家具ばかり豪華な家に、人間は彼女一人だった」

その口ぶりで、察してしまう。

「人はいなくても、猫はいた？」

「それがニアにとつて唯一の家族。物心ついたときからいっしょに遊びるときには同じものを食べ、隣で丸くなって寝る。猫が育つて当然だろう」

黒髪の美少女が、毛足の長い猫と並んで寝転がる。ふいに浮かんだ光景は、意外にもしっくりきた。留守ニアは猫なんだと、心はずでに諦めているらしい。

「が、親にとつては自分の子だから当たり前に学校へ送る。馴染めるはずがなく、彼女は荒んでいった。耐えかねて家出したところを、偶然拾ったのが私さ」

黒く縮れた灰を落とし、煙ではなくため息を溢す。

「あの子は、私にずいぶん懐いている。けれど私はあくまで一時の保護主。彼女にはもつと、歳の近い寄り添い相手が必要だ」

くゆる煙草の先端が、びつと私を指す。

「君はなかなか面白い生徒だった。私が完璧に調教したニアに、頑なに冷たい態度をとる。その裏に恋心があると確信したときはたまげたよ。ともかく、君が理想主義

なのは知ってるがそのうえで頼みたい。あの子のパートナーに、」

「わからないんですけど」

視界を遮る白煙を、ぼつと払いのける。その向こう側努めてにこやかな針谷を睨みつける。一步、近づく。その本性を、見極めようとする。

何を言っているんだこの人は。

「そんなことするメリット、先生にあるんですか」

違う。違うだろう。

お前は。

「先生は、」

私にこんな話をする人間じゃない。

「同類でしょ、私の」

笑顔は笑顔のまま。ただ、その瞳の奥から何かがせりあがってくる。それが吹き出す前に全部、ぶつけなきゃいけないって気がした。

「見たのよ。あなたの、私物」

想起される。真理垂とともに、あの中身を見てしまった瞬間が。

あれは本じゃなかった。

「写真を、女の子の写真でいっぱいなの、アルバム」

歳が一番下は小学生、上は高校生。どことなくあどけない雰囲気の子が多い。服は上下揃いに来ているし、みんなカメラに笑顔を向けている。

「ないと思ったら。君が間違えて持って帰ってたのか」

針谷は、居場所がわかってほっとした、という様子で煙草を灰皿に擦りつける。

「記念写真だよ、あれは。私が今まで世話を焼いた子たちが、保健室から卒業するときに撮ったものさ。男女別にしてるから、あれには女の子しか載ってないだけ」

よどみなく彼女は説明する。大抵の人なら、それで納得するだろう。

けれど私は、その他大勢から外れた存在だから。

思春期まっさかりの発情レズだから。

嗅ぎ取ってしまったのだ。

「何なのよあの絆創膏」

全員の首筋に、べたりと一枚だけ貼られた絆創膏。その下の皮膚はいかにも健康。

異なる、異なる、癖んだ性を感じさせる要素。

「お前は私と同じ、いえ。私より救いようのない変態野郎なんじゃないかしら」

レズでロリコン。口に出すのも憚られる非現実の極み。

「……まいったねえ」

低い声で呟いて、針谷は煙草を擦り続ける。

火はとくに消えていた。

「犬は鼻がいいから嫌いだよ」

振り向いた瞳は、本来の色を覆い尽くして、真っ黒な感情に吞まれていた。背筋が凍る。いつでも逃げられるよう構えなきや、と思ったときに私の背中はずでに壁にあつた。

危ういところで、その肩を押し返す。

あと一秒、反応が遅れていたら私の唇は奪われていた。

「……っ、な、何、すんのよ」

まつ毛が擦れるほどの近さ。当然、彼女の吐息は紫煙がまぶされており、砂利のようにざらついた匂いで私の鼻腔を犯す。

「何って、ご褒美だよ。君の鋭さにゾクゾクさせてもらったからさあ」

恍惚と呟いて、彼女はゆっくりと身体を上下にくねらす。触れ合うというよりも、掠めるような。もどかしい

摩擦。私の体表を這う。

口を開いたらきつとそういう声になってしまふから。

唇をきつく結び、代わりに射殺さんばかりに睨みつける。

「そう緊張しないでくれ。あは、これでも男女ともに経験豊富だよ？ ま、長続きはしなかったけどさ。それとも、三十近いおねえさんには興味ない？」

胸へと忍び寄る手。一瞬、拒むか悩む。だが蕩ける脳の最深部、いまだ硬く揺るがない何か、私に正しい行動をさせた。

「さ、最初の質問に、答えなさいよ！」

「さ、最初の質問に、答えなさいよ！」

出した声は、頭で描いていたほどかっこよくはなかった

「……守りたいからだよ」

「あなた、ろ、ロリコンなんですよ？ だったら留守さんは、理想の相手なんじゃないの？」

「……お断りよ」

呼ばれば素直に応じる。明らかに邪険そうだったネ

グリジェも脱がない。留守さんは針谷にとっても従順だった。そのうえ見た目は小学生に匹敵。変態野郎にとって

は、願ってもみないロリ高生。

それを、手放す理由があるものか。

「……守りたいからだよ」

意外にもあつさりとして、針谷は答えた。

「私の現実をね」

冷めた表情で私から身体を離す。そして見せつけるようにぐつと、白衣の襟を引っ張った。

「胸のない女の子にしか欲情しない。けど、そういう子に手を出すと犯罪者扱いされてしまう。このジレンマを解消した現実空間。それが、私にとっての保健室」

その瞳は、爛々と誇らしげ。

「少女たちは私の手で人生を救われる。私は彼女たちの

心に、治療痕として一生残る。肉体関係を持ってないのは惜しいが、なかなか現実的で美しい関係だろう。それが、あの子ときたら懐きすぎなんだよ」

朗々とした語りは、いつの間にか苦々しい愚痴に変わる。彼女はやれやれとくたびれた様子で、二本目に火をつける。

「だから君さ。あの猫を、私から寝とつてくれよ。私の現実を守るために、さ」

「口元にはいくら見慣れても腹が立つ気障な笑み。まるで、自分の言動は疑いようのない真理に基づいているとも言いたげだ。」

「……お断りよ」

「……お断りよ」

「……お断りよ」

「……お断りよ」

「……お断りよ」

「……お断りよ」

「……お断りよ」

「……お断りよ」

「……お断りよ」

「……お断りよ」

「……お断りよ」

「……お断りよ」

「……お断りよ」

「……お断りよ」

「……お断りよ」

「……お断りよ」

「……お断りよ」

「……お断りよ」

「……お断りよ」

「……お断りよ」

「……お断りよ」

「……お断りよ」

「……お断りよ」

「……お断りよ」

「……お断りよ」

「……お断りよ」

「……お断りよ」

「……お断りよ」

「……お断りよ」

「……お断りよ」

「……お断りよ」

「……お断りよ」

「……お断りよ」

「……お断りよ」

「……お断りよ」

想ってどつちのかな？」

背後から声。欲深い狐が、狡猾に取り入ろうとしているような声。

「どつちって、何が？」

私は、つい答えてしまう。

「お姫様と王子様。本当に壊れるのはどつちの理想像かって聞いているのさ」

振り向けば、雲間から覗く赤い月のような眼光。射すくめられた私は、息を飲んで身体を強ばらせた。

その一瞬のうち針谷は一矢を放つ。

「自分に幻滅するのが怖いんだろ」

私の心臓を、確実に射抜く言葉を。

「素っ気ない態度は、悲惨なまでの口下手を隠すため。

ニアと他人が仲良くするのを嫌うのは、その輪に入れない自分が情けないから。かといって二人きりは会話が続かない」

指折り数え、彼女は微笑まない。

「根暗で内気で、誰にも好かれぬ。これが天原晶という人間さ」

道端で泥にまみれるハンカチを見るような。

侮蔑もなければ同情もない。

「君が逃げ続けてきた現実だよ」

心底どうでもよさそうな顔で、淡々と紫煙を吐いた。

——おかしいのだ。

いつも妄想のためと言いながら、現実の留守さんを避けていた。

けれど、本当に妄想だけで満足なら。

現実の彼女がどうであろうと関係ないはずなのだ。

私の言動は、ずっと矛盾していた。

そう気づいていることに、気づかないふりをしていた。

鏡はないのに見える。

かっこつけて染めたはいいけど、いまいち似合わない金髪。目つきの悪さを誤魔化すために伸ばした前髪。笑った形が不細工な口。後ろ暗い過去でもあるかのように、俯いてばつかの姿勢。困るとすぐに髪の毛をいじる手。

ひとつも解釈どおりじゃない私の姿。

私にとって一番可愛かったのは、留守さんじゃない。

ほかでもない私自身。

土穴にもって自分をペロペロ可愛がっている犬に。

王冠なんでもつたない。

足元がぐにやりと歪む。まるで丸いものを踏んづけて

しまったかのように、私の身体は後方へと傾いた。そのまま後頭部を激しく打ちつけ、春の大三角形に看取られて死にたい。

けれど、死ねないのだ。

「……………じゃあ。取引、よ」

すんでのところまで足を力を入れる。膝は曲がってるし

前かがみ。きつと、ひどく不格好な仁王立ちになっている。

だが足を踏み直した足裏では、ガリツと確かに、何かを碎いた感触がした。

「あんただけ自分の現実を守るってずるいじゃない。だから、私の理想も守らせなさいよ」

いつもいつも針谷にされていたように、人差し指をつ

きつける。

「あんたみたいな王子様ふりができるように、私を調教してみなさいよ！」

私も留守さんも、虚構ばかり。

理想は限りなくゼロだけど。

私が留守さんに好かれたと思ったこと。

この感情だけは本物だ。

果たしてその訴えが、針谷を揺さぶるかどうか。肩で荒く息をして、彼女が煙草から口を話すのを待つ。

「……………へえ」

丸くなる瞳はほうじ茶のように澄んでいる。芝居が

かった調子で、彼女はすつと両手を広げた。

「私は現実、君は理想。それぞれのための共同戦線。最終目標は、君がニアと恋仲になること。あつは、面白い

じゃあないか」

人知の限りを掌握した悪魔のように、彼女は大げさに

天を仰ぐ。

「乗るってこと？」

「断る理由がないね。君は君で、私の傀儡になる覚悟はあるの？」

炭火のような赤髪を揺らし、妖しげな三日月を私に向

ける。不気味な微笑に、背筋がぞわぞわする。だが、決

意は鈍らない。

「仰せのままに」

私は犬のように針谷に従う。針谷は狐のように私に憑

く。

そうして猫のような少女、留守ニアとラブになる。

ニアラブ。

果てしなく遠い方程式のため、歪な三角関係が始まっ

た。